

## アダム・スミス『道徳感情論』における自然神学

太田 浩之 (社会学研究科 博士後期課程)

報告は、アダム・スミスの『道徳感情論』における自然神学的枠組みと道徳理論との関係を、主にテキスト内在的な分析によって明らかにすることを、目的とするものである。

経済学理論にとどまらない、スミスの多様な側面を把握するという近年のスミス研究の傾向にあって、自然神学とスミスの思想の関係は、決して他の分野に比べて研究が進んでいる領域ではないが、それでも以前に比べ着目されつつある。スミスの神学観は、主に『道徳感情論』から把握することが可能であるが、彼の理論が自然神学と密接に関係しているということは、明らかであり、これはスミスが、『道徳感情論』において、度々彼の理論的帰結を、自然Natureの意図であるとしていることから理解が可能である。しかし、それでは実際に、具体的に、スミスの自然神学的枠組みと、彼の理論がいかに関係しているのか、ということに関しての研究は十分には行われていないように思われる。

実際、スミスの自然神学に関する先行研究には、スミスの自然神学的な枠組みと彼の理論との関係を把握するというよりも、スミス自身の宗教（信仰）的立場を推測するという点に最終的な目的を置いているものが少なくない。しかし、こうした試みは、資料的な側面において決定的な要素を欠いているため、多くの推測を許すものになっており、スミス研究において大きな成果を挙げているとは思われない。ここで、我々が着目をしなくてはならないのは、スミスが、いかに自然神学的な枠組みを『道徳感情論』に導入しているにしても、彼が最初に出版したのは、まさにその本であるということである。つまり、スミスは『道徳感情論』を論じる前に、自然神学に関する著作や論文を出していないのであり、『道徳感情論』がそれなしでも論証として成立しようと、少なくともスミスはみなしていたと考えられるのである。したがって、『道徳感情論』の自然神学に関する記述からスミス自身の宗教的立場を論じるということは、『道徳感情論』それ自体が、神の存在と属性を証明することを目的とした書物ではない、という限りにおいて、ある意味で不適切な試みであると言えるのである。

確かに、『道徳感情論』の記述から、スミス自身の宗教的立場を読み取ることは可能であるが、そこに展開されている自然神学的枠組みは、まずもって、スミスの道徳哲学理論との関係で捉えられる必要があるのであり、その場合に、より正確にスミスの意図が把握されることが考えられる。本報告は主にこの点に焦点を当てたものであり、彼の自然神学が道徳哲学理論とどのように整合的に把握されるのか、その関連を示すことを目的とするものである。また、この報告によって、自然神学が、『道徳感情論』のみならず『国富論』を含んだ彼の思想において重要な役割を果たしているということもある程度示したい。